

三郎は職場へ、いつも三十分くらいかけて通っていた。職場の近くに引越した方が良いと、同僚によく言われたし、三郎自身もそう思っていた。でも、今はそう思っていない。むしろ、この時間がとても愛しく思える。自分の人生の中で大切にしたい時間だと思っている。

蝦夷梅雨というのか、最近めつきり蒸し暑い。今日も空の様子が思わしくない。灰色の空には、その先にあるはずの青が、未だ顔を出さない。

屋内から見える木々の揺れを通して、風の強さや外の寒暖を推し測り、今日の服装を決める。今日の風はボウボウとうなっている。のしかかる風の重さを想像し、三郎は少しだけ憂鬱な気分になった。

雨降りに備え、黒ずんだビニール傘を自転車に装着。兄のお下りのビニールの黒いかばんを前のカゴに突っ込み、自転車にまたがる。

タイヤの空気圧が減っているのか、自分の体が重いのか、今日はやけに進みが重い。それに加えてこの風だ。ひとこぎひとこぎ、頑張って前に進む覚悟をした。

昨日の仕事の疲れがまだ残っているのかもしれない。背中に、バキバキとした、きしみのような痛みを覚える。

出発したらすぐに、左手に教会を望み、勢いを増した向かい風に立ち向かう。公園が右手に見えてくる。公園を取り囲むように植えられた桜の木々。中でも一番端にある桜。通るたび、いつも自分の心を吸い寄せる。ひと月前には、もりもりと八重桜を結んでいたこの木も、今は緑に覆われている。

つい先日の桜吹雪を思い出し、夢の世界へ迷い込んだ過ぎし日を思い、一人感慨にふける。ただの桜の木だが、今自分と通じ合ったこの木は、自分にとって、世界で唯一の存在になっている。三郎はそう思いながら、ペダルを押し続けた。

ぼんやりと、今日、来る予定になっているクライアントの顔を思い浮かべる。「あのお客さん、今回はこんなこと言ってたなあ。あの時、納得していない様子だったな。今日はどう対応したものか。」などと思ってみる。

曲がり角で鉢合わせをし、思わずぶつかりそうになった中年の女性と目礼を交わし、交差点をわたる。

ブロックの角にある小さなパン屋。いつも、行列ができています。大人が五人入ったら、もう身動きが取りづらい。それぐらい小さな店だ。

一般的な一軒家の一階を店舗に改築したようだ。狭い店内には、さらに奥があり、そこでは、白衣白帽に身を包んだ何人かの職人が、狭い中にひしめいてパン作りに勤しんでいる。

三郎は、小学校の時に行った、社会科のパン工場見学を思い出していた。記憶の中では、ここまで狭くなかったように思う。狭いスペースにギュウギュウにいろんなものを詰め込んで、そこに一つの世界を作る。日本的な感じがして、三郎はなぜだか嬉しくなった。荷物を小脇に抱え、小さくなりながらおいしそうなパンを選び、周囲を気遣いながらお会計をもらった時のことを思い出した。

札幌駅直結の高層タワーが右手に見えてくる。家から職場までの、ちょうど中間くらいの地点だ。

あ、雨が降って来た。やっぱり…

背中を丸め、小走りに道を急ぐ人。目的地に近いのか、落ちてくる小さな雨粒を意に介さず、歩みを変えない人。自分と同じように自転車に乗り、傘をさすタイミングを見計らっている人。いろんな人がいた。

ふと顔を上げると、顔がダンボールの人がいた。はて面妖な。

雨よけのつもりだろうか、二リットルのペットボトルが六本入るサイズの細長い直方体のダンボール箱。それをすっぽりと頭にかぶっている。さして急ぐ様子もなく、悠然と横断歩道を渡っている。

三郎は、阿部公房の『箱男』を思い出した。彼の箱男と同じように、持つために開けられたくり抜き部分をのぞき窓にして、そこから世界を見ているのだろうか。今、自分の目の前を通り過ぎるダンボール男も箱男を意識しているのだろうか。世の中にはいろんな人がいるものだ。三郎は、そう感心した。

いくつかの魚屋が軒を連ねた場所に出た。小路を左に折れた所にある「軒の魚屋」には、三十代半ばくらいの眼鏡をかけた男性がいる。毎日毎日、携帯電話をいじっている。学生風の髪型に、決して快活そうには見えない陰の差した顔立ち。身長はそれほど大きくない。自分より少し小さいか。三郎はそう思案した。長靴を履き、前掛けもしているから、そこで働いている人だとは思う。

話したことのないこの人に意識を向ける。目線だけではなく、意識も向けている。その人は、意識を向けられているとは絶対知らない。ただ、丸めた背中の向こうで大事なケータイを触っているだけ。誰かとながっているのか、それともゲームを楽しんでいるのか。話したこともないこの人に、いろんなストーリーを演じてもらう。

もしかしたら、魚屋は両親のやっている店で、自分は夢破れて東京から引き上げてきたのかもしれない。そして、引きこもるくらいなら、追い出すと言われ、しぶしぶ家業の魚屋を手伝っているだけかもしれない。勝手に人の来し方を想像する。この時だけ、この一瞬だけ、この人と自分の人生が交錯する。風を受けながら、三郎はそう思いを巡らした。

幸い、雨は小降りのまま踏みとどまってくれた。結局、傘はささずに職場へ到着。今日も一日頑張ろう。そうやって今日が始まる。

(二〇一〇年十一月二十六日)